

選択できる人生を切り拓く（服部美奈）

続きまして、第3巻『教育とエンパワーメント』についてお話しいただきたいと思います。服部美奈先生と小林寧子先生のご編著です、2020年12月に刊行されました。では、服部先生お願ひいたします。

服部：服部と申します。まずこの本のきっかけですが、2017年3月10日に名古屋で公開セミナー「イスラーム社会における教育とジェンダー」を開催させていただきました。その時に本当にいろいろな方のご協力を得たのですけれども、その後、シリーズ本の一冊として教育関係で出してみませんかというお誘いをいただき、共編著として小林寧子先生と共に編ませていただくことになりました。私たちは二人ともインドネシアの研究をしておりまして、私はインドネシアのイスラーム教育の研究を、小林先生はインドネシアのイスラーム近現代史をご研究されています。

今日のタイトルは「選択できる人生を切り拓く」ということで、この言葉に想いを込めました。第3巻を編むにあたっての基本コンセプトは三つありました。一点目は、「イスラーム地域の女子教育に対する一面的な見方を補正し、イスラーム世界の多様性を示す」ということです。マララさんの事件がマスコミで大きく取り上げられたり、アフガニスタン情勢があつたりするなかで、一般的に、イスラーム世界では女子が教育を受けられないのではないかというような見方があります。しかし、必ずしもそうではないということを示したいと考えました。二点目は、「知の獲得、言い換えれば教育の持つ力が人々をエンパワーする動力となること、知を活かすことによって女性たちが自らの置かれた状況を意識化し、自らの人生を一層豊かに生きられるようになることを示す」ということです。三点目は、本を編集するにあたって「プラス思考の姿勢を貫く」ということです。実際、現実には教育にまつわる課題はいろいろあるのですが、この第3巻では教育がムスリム女性をエンパワーしていくのだということをあえて強調した構成をとりました。

次に、対象地域の設定については、地域のバランスに配慮して13か国、具体的にはトルコ、エジプト、アルジェリア、イエメン、カタール、イラン、ウズベキスタン、アフガニスタン、中国、バングラデシュ、マレーシア、インドネシア、オランダとして、東南アジアや東アジア、南アジア、中央アジアといった国々も含みこむ形で地域設定をいたしました。

章構成にあたっては、大変立派な方々が本書の執筆に関わってくださいました。ただ、一つ大変残念だったのは、ちょうどコロナが流行した時期と重なったこともあり、執筆者の皆さまと研究会を開催するといったことができなかった点です。実は、執筆者の皆さまには、あらかじめ本のコンセプトをお伝えしただけでしたが、皆さまが不思議なほど本書の意図をすくい取ってくださった上で、それぞれ個性のある内容を書いてくださっています。

本にすることで得られた気づきは、「共鳴性」と「地域性」です。「共鳴性」は、「地域を越えて共鳴する声と連鎖」への気づきです。19世紀末から20世紀初頭以降、植民地支配あるいは西洋列強の影響力の拡大により、多くの地域に近代学校教育が浸透していきます。そ

のような時代背景のなかで展開したイスラーム改革運動には、イスラームそのものを改革していくこうという動き、旧来の教育を変革していくこうという動きとともに、女子教育を積極的に奨励する動きがありました。そしてそれが、地域を越えてほぼ同時代的に起こったということに改めて気づかされました。ちなみに、改革運動の発信源や参照枠となっていたのはエジプトやトルコで、そこで発信されたメッセージが、雑誌や人々の往来によって各地に広がっていました。また、女性教師の存在が大きかったということが、どの地域でもみられます。そのため、女子教育を奨励する機運の高まりとともに、その子どもたちを教える女性教師が必要だということで、19世紀末頃から数多くの地域で女子の師範学校が作られています。女性教師の存在は、教育を受けた女子生徒にとって一つのロールモデルになっていました。このこともまた、ほぼどの地域にも共通しています。

次に、「地域性」に関しては、さきほど述べましたように多くの地域で「共鳴性」つまり、「地域を越えて共鳴する声と連鎖」が起こるわけですが、それぞれの地域は、発信源となつたエジプトやトルコの思想や実践をただ単に受動的に受け取っているわけではなく、地域の文脈で主体的に選び取っていくことに改めて気づかされました。教育に関する言説についても、エジプトやトルコから発信される思想、例えばムハンマド・アブドゥーやカーシム・アミーンなどの思想はインドネシアにも多大な影響を与えたのですが、それらの著名な思想家の言葉がすべて受け取られるわけなく、思想の一部あるいは言葉の一部が抜粋される形で「女子教育が必要だ」というメッセージとなりインドネシアに伝わっています。ちなみに私は以前、インドネシアで1923年に設立された近代的イスラーム女子学校の研究をしたことがあるのですが、本家本元のエジプトでイスラーム女子学校が設立されたのは1960年代だと言われています。インドネシアを含む東南アジアの人々は当然、すでにエジプトにもイスラーム女子学校があるものと考えて留学を考えますが、実はエジプトに行ってみたら女子学校はなかったといった笑い話もあります。これは一つの事例ですけれども、様々な地域での思想の受容の仕方や選び取り方、そして実践の仕方には「地域性」があり、そのあたりが面白いところだと思いました。このことは、ヴェール着用の問題や男女共学・別学の問題、両性に対して何をどのように教えるかといった教育内容の問題、さらに近代学校教育をどこまで受容するかといった問題にも共通しています。それぞれの地域にはそれぞれの個性といいますか特徴が現れます。

このほか、多くの地域に共通する問題として、このことはおそらく教育の領域だけではないと思いますが、ジェンダーが論じられる際には非常に多くの場合、「他者の介入」があります。ムスリム女性の教育の問題は、多様な「他者」の思惑の中に置かれています。女子教育の必要性を唱えたのは、植民地政府だけではありませんでしたし、イスラーム改革主義者だけでもありませんでした。いわゆるイスラーム伝統派の人たちも主張しました。このように、様々な立場の人々が「他者」として、ムスリム女性をひとまず蚊帳の外に置いたところで、女子教育や家庭の問題を議論するという状況がありました。また、ムスリム女性は、しかしこのことはおそらくムスリム女性に限られることではないのだと思いますが、常に「他

者」からの視線に晒されているという点も共通する問題としてあるかと思います。一例として、発展途上国における「開発」政策への女性の動員や、国家における開発の担い手としての女性という言説は、時代を問わず、国家政策のなかでしばしば展開されます。つまり、誰が最も「ムスリム女性の尊厳」を尊重しているかという、「他者」によるパワーバランスをめぐる言説と権力の中に常にムスリム女性が置かれており、そのパワーバランスのなかで政策が決まっていくという状況があります。そのような状況のなかで、「他者の介入」は明確に表れるのではないかと思います。

このほか、本書全体を通して提起された問い合わせておきたいと思います。第一に、教育達成と卒業後の問題です。具体的には、男子と女子で受けた教育は同じでもジェンダーによって出口が異なるという問題です。端的に言うと、ウラマーになることを目標にエジプトのアズハル大学に進学したものの、結局のところ女性はウラマーになれない、そのため次善の策として、教師になったりアラビア語の通訳になったりする。同じ教育を受けても出口が異なる、それはつまり、教育機関が有する男女平等の論理と現実の社会構造との間に矛盾があるということです。これは、多くの地域でみられる現象です。

しかし一方で、私自身は個人的に、女性の活躍を測る尺度として現在国際的に用いられているジェンダーギャップ指数が示す、いわゆる政治、経済分野を主とする「社会」での活躍と、個人が獲得した教育の「成果」は正比例しているはずだという暗黙の前提に対する考え方への懐疑をもっています。ジェンダーギャップ指数の指標を用いて、教育の到達度とともに、政治参加や経済参加についてもスコア 1.0（平等）が目指されなければならないという成果の測り方は価値中立的ではないと私は思っています。特にイスラーム社会は、金銭に換算できない、あるいはあえて換算しない社会活動が盛んな社会であり、ムスリム女性はそのような社会活動に積極的に関わり、活躍しています。もちろんジェンダーギャップ指数を否定する意図はありませんが、一方でそのような観点からの見直しが必要ではないかと思っています。この意味で、ムスリム女性の教育達成と社会での活躍のあり方は、教育の「成果」を多様な観点からみる視点につながり、ひいては未来の教育を考えるパラダイム、未来の教育を変えていく一つの契機になるのではないかと感じています。

また、ジェンダーギャップ指数の議論とも関連していますが、本書のキータームとして、「公平さ」「公平と配慮」「ジェンダー格差」といった観点があげられます。女子教育を考える際、何をもって公平と考えるのか、何が平等なのか、一方で、女子であることへの配慮をどのように考えるのか、女子への配慮は公平といえるのかといった議論が常に浮上します。これらの議論とともに、その議論を乗り越えるための一つの試みとして、「倫理的イスラーム・倫理的努力」「男並みでないジェンダー平等」というキータームも登場します。そういったキータームのなかに、自分たちができる身の回りから社会を変えていこうとする流れ、そして、男性に働いてもらうことによって経済的なことは男性に任せ、経済活動とは異なる分野で自分たちが社会を変えていこうという流れがあることも、本書から読み取ることができます。

最後に、本書のタイトルである「教育とエンパワーメント」に込めた思いについてです。教育は、自分で自分の人生を選択できる、あるいは選択できる人生を自分で切り拓くための重要な手段となるもの、もう少し強い表現を用いるとすれば一つの強力な武器となりうるもので。女性たちに対する作られたまなざしや期待、固定化された役割のなかに女性を留めおこうとする社会構造があるなかで、制限を受けつつも女性が主体的に選び取っていく姿が本書では随所に現れていたと思います。一人の研究者としても、今後の研究においては、他者による意味づけや教育の経済的な価値に過度に惑わされることなく、ムスリム女性にとっての意味づけを問う研究の視点が必要だと考えています。

後藤：服部先生どうもありがとうございました。今、たくさんの論点を挙げてくださいました。そのなかで、「提起された問い」のところに「教育達成と卒業後のずれ」だとか、ジェンダーギャップ指数が社会での活躍と教育の「成果」というのとなかなかうまくかみあっていないのではないかというようなご指摘がありましたが、たまたま私が持ってきた本の一つに『ジェンダーの扉を開こう』という日本の10代の若者向けの新しいジェンダー入門書があって、そのなかにまさに同じ問題が扱われていて、今回『教育とエンパワーメント』で、東南アジアから広がるムスリムの教育の問題を扱っておられるのですが、日本の問題としてもかなりパラレルに見ることができるのだなということを改めて思いました。ありがとうございました。